

20世紀初頭のモンゴル人がモンゴル史に対して取った姿勢

1911年の民族革命の結果、清朝支配から脱してモンゴル人が独立と国家を復興したことは、満洲人に帰順して以降のモンゴル人の歴史における民族覚醒の最大の出来事であった¹。このようなモンゴル人が、国家復興を宣言した国家儀式の時に、そして建設した国家の面から、自らの民族史、伝統をどう理解し、自分たちの歴史に向き合っていたかについてここに簡単に述べたい。

1911年12月29日、フレーの中央宮殿に8世ジェブツンダムバ・ホトクトをモンゴル国ハーンに推戴した大国家儀式の活動

G.ナワーンナムジルの『老書記の文章』²には、「…大門の前に着くと、多くの人が集まっていた…。花翎、頂子、フREM、斑のデールを身につけた王公、官吏、化身、僧達が集まっていた…。ボグドが白ターラと共に大儀式に向かうと…前には…高僧達が集まって進んでおり、…2-3人の世俗王公が先導する。多くの近衛兵が道の両側に銃を持って儀礼服を身につけて並んでいた。ボグドが皇后と共に黄宮殿の中央門を通過して宮殿に入ると、これら王公、僧達が皆付き従って入り、近臣の大王公、高僧達は皆宮殿に入っていた。他の王公達は、国家宮殿の前で立って待っていた…」³、「ボグドの法会宮殿の門から、国家宮殿の北側にある4頭の獅子を彫刻して支えてある様々な金の模様の入ったハーンの玉座台まで、またオチルダリ読経堂へ、人が歩くための細い板でできていて黄絹を敷いた道「ガルダン」を準備した。…ベイス・ポンツァグツェレンが手に大きな文書を持ってきて、恩恵を広める勅令が下った、と高い声で言う。ボグドをモンゴル国日光万寿ボグド・エゼン、白ターラを国母として推戴し、年号を共戴と名付け、イフフレーを国の中心たるニースレル・フレーとし、モンゴル国を建設し、盛大な儀式を執り行った」⁴とある。マグサルジャブ・ホルツはこう書いている。「モンゴルの国家宮殿、5省を予め修復する際に、中央の家屋を全てモンゴルゲルで建てた」。これらの史料から見ると、モンゴルの国家儀式を10数ものハナからなるモンゴルゲルで行ったのが明らかである。チンギスを大モンゴル国のハーンに推戴した時には、モンゴルゲルが国家宮殿であったことは疑いないことである。プラーノ・カルピニは、象牙で作り、金、宝石で飾り立てたハーンの玉座があったことも記述

¹ О.Батсайхан Монголын сүүлчийн эзэн хаан Богд Жавзандамба хутагт: амьдрал ба домог, нэмж баяжуулсан хоёр дахь хэвлэл, УБ.,2011 он.

² Г.Навааннамжил. Өвгөн бичээчийн үгүүлэл. УБ. 1956.

³ Г.Навааннамжил. Өвгөн бичээчийн үгүүлэл. УБ. 1956.

⁴ Г.Навааннамжил. Өвгөн бичээчийн үгүүлэл. УБ. 1956. pp.182-185.

している。

『モンゴル国自治政府時代の実情と重要事の記録概要なる歴史文書』には、「モンゴル国の新国家を開き、一個の国を建設し、皆の師たるボグド・ジェブツンダムバを国のハーンに推戴し、大玉座に就かせ、宗教と政治の全権を共に握らせ、国名をモンゴル、年号を共戴と名付け、イフプレーを国の中央たる首都とし、…5省を建設し…」⁵とある。L. デンデブは、「モンゴルが自立した国になり、ボグドをモンゴル国ハーンに推戴し、玉座に就けた」⁶ことについて記述している。モンゴル国家が復興され、数百年間中断したモンゴルという名称を付けた国名が再び出てきたことは、この玉座がチンギスの玉座の継承であることを思わせる。

Kh.ペルレーが記録した回想には、「モンゴル国の主、宗教と政治を共に掌握する者、日光万寿ハーンを推戴する宣言文書を、ハルハのサイン・ノヤン・ハン・ナムナンスレンが右膝を跪いて読み上げ聞かせると、国家儀式の参加者たちは皆右膝を跪いて叩頭した。新国家建設に特に尽力した者達と皆に恩恵を広める勅令を、ダーラマ・ツェレンチメドが読みあげた」⁷とある。また、ボグドに杯を捧げる際にはチン・ワン・ハンダドルジ、グン・ナムスライが、印璽を奉呈する際にはグン・チャグダルジャブ公が、奉書にはサイン・ノヤン・ハン・ナムナンスレン、ジャンジン・ベイス・ゴムボスレンが、マンダラにはトゥシェート・ハン・ダシニヤム、セツェン・ハン・ナワーンネレンが、仏像にはハムバ・ノモノ・ハン・ポンツァグ、デド・ハムバ・ソドノムダルジャーが、経典にはマンズシリ・ホトクト・ツェレンドルジ、ジャルハンズ・ホトクト・ダムディンバザルが、仏塔にはノモン・ハン・ジグメドルジ、エルデネ・ハムバ・ロブサンツェレンダグバドグミが、七宝にはシャンゾドバ・バダムドルジ、メルゲン・ハムバ・デムベレルダシが、万歳を満たす仏にはダー・ジュン・ワン・ゴムボスレン、メルゲン・ワン・アナンドオチルが、祝詞にはダーラマ・ツェレンチメドらが任命され遂行したことが、文書館史料に記録されている⁸。

ボグド・ジェブツンダムバ・ホトクトをモンゴル国ハーンに推戴して式典執行官が上奏した祝詞には、「チンギス・ハーンの子孫トゥシェート・ハンの息子達から続き、兆しが特に明らかに移り変わり、三世を明らかに示し、幾百年皆で共に戴いた宗教を栄えさせ、有情に息災をもたらす者、救済と信仰の一切を仰せになる者、頂珠寶、陰陽を共に慈しみ創ったオチルダリ救度者ボグド・ゲゲーンをモンゴル国の主、宗教と政治を共に把握する者日光万寿ボグド・ハーンに推戴」した、と初めてチンギス・ハーンの名前が表れている。

ボグド・ゲゲーンが恩恵を広めた勅令で「新国家建設に特に尽力した」とモンゴル国政府の最初の大員として挙げられた5人の内の4人は、チンギスの血縁である黄金の一族の人々であった。つまり、トゥシェート・ハン・アイマグのザサグ、ホシヨイ・チン・ワン・ハンダドルジ、セツェン・ハン・アイマグのザサグ旗のベイス・ゴムボスレン、トゥシェート・ハン・アイマグのザサグ、オルスィン・トゥシェー・グン・チャグダルジャブ、同アイマグのグン、ザサグ、一等タイジであるナムスライらが入っている。他の恩恵を受け

⁵ Монгол улсын автономн хэмээх өөртөө эзэрхэн засах эрхт засгийн үеийн үнэнхүү явдал чухам байдал, чухал учрыг тэмдэглэсэн товч өгүүлэл хэмээх түүх бичиг. УБ. 1992. р.9.

⁶ Л. Дэндэв. Монгол улсын товч түүх. УБ. 2006. р.88.

⁷ Г. Дашням нар Пэрлээгийн Монголчуудын байгаль хамгаалах, утга соёлын түүхэнд холбогдох хоёр бүтээл. УБ. 2001. pp.30-31.

⁸ УТА Ф.А3-Д.1-ХН.2-Х.16.

た者たちの大半が、チンギスの血統のハン、王、公達が占めていた。彼らの中に、トゥシェート・ハン・ダシニヤム、セツェン・ハン・ナワーンネレン、ザサグト・ハン・ソドノムラブダン、サイン・ノヤン・ナムナンスレンが先頭に入った⁹。

ボグド・ジェブツンダムバ・ホトクトをモンゴル国ハーンの座に推戴する際に奉呈した物品について

モンゴル人は、昔から国のあらゆる儀式を行う際に、九白の貢を捧げる伝統を有する。この伝統は、1911年には、インド、チベットの国の象徴と合わせて用いられていた。原史料には、ボグドをハーンに推戴し、帝宝、九白の貢を大いに奉げたと記されている。マグサルジャブ・ホルツは、ボグド・ハーンに「帝宝、玉璽、金字冊、モンゴルの地から出た儀礼のための九白の貢の白駱駝、銀の鼻勒、貂の飾り房を1つずつ、白馬、貂の飾り房を8つずつ、ハダグ等を贈物として」¹⁰奉呈したと記録されている¹¹。

帝宝すなわち輪王七宝の中には、輪宝、珠宝、女宝、居士宝、象宝、馬宝、将宝、が入る。これら七宝をインドではチャクラヴァルティ王が用いていた宝であると説明している。

1911年にモンゴル国ハーンとしてジェブツンダムバ・ホトクトを推戴した際に作った「宗教と政治を共に掌握する者、日光ボグド・ハーン印」という文字の入った白玉印、銀印、モンゴル国皇后の印は、モンゴル国が独立全権国であり、ハーンを戴く国であることを示す内容、性質を持つものである。1911年に、ボグド・ジェブツンダムバ・ホトクトをモンゴル国ハーンの玉座に就かせ、昔のモンゴルのハーン達に倣い、白玉で印を作り、ボグド・エゼン・ハーンに奉呈したことについて、白髪の老人達が話していた。モンゴル国ハーン、ボグド・ジェブツンダムバ・ホトクトのデール、フレム、冠などに独立国家の長のしるし、ハンと国の宝の特徴を何らかの程度入れるべく努めていた。

1915年に下されたボグド・ハーンの勅令では、「ジェブツンダムバ・ラマは昔の明代の者である。大元国の太祖の代から続くハルハのオチルバト・トゥシェート・サイン・ハン・ゴムボドルジの家に化身が現れ…」と、ウンドゥル・ゲゲーン・ザナバザルについて記述し、「現在、8世ジェブツンダムバ・ホトクト・ラマも…全モンゴル氏族を善導し、あまねく人々の力が充ちるが如く安寧の光輝を享受せしめた。そのため、代々用いてきた称号に、救済と信仰の一切を仰せになる者、頂珠、オチルダリを追加し、金印、金葉冊を与え、大元国の旧法に従い、あらゆる国家の事を処理する箇所を皇帝たる私が指導するが、ジェブツンダムバ・ラマ汝を宗教の主、長として推戴し、平日には法会を管轄せしめ、浄信の恩恵を祀り栄えさせた」¹²と記されている。

この勅令の中に、大元国の旧法に従い、という語が入っている。これは、国家の事を処理する時にハーンは宗教の長よりも権力を持つ、ということを規定して言ったことである。この勅令を下したことにより、1874年に満洲皇帝から8世ボグド・ジェブツンダムバ・ホトクトにハルハ・モンゴルの宗教の長として与えた称号、金印、長としての位を無効とすると共に、モンゴルは独立国であると明らかに示したのである。

⁹ УТА Ф.А3-Д.1-ХН.2-Х.16.

¹⁰ Н.Навааннамжил. Монгол улсын шинэ түүх. УБ. 1994. pp.33.

¹¹ 九白の貢の費用は280両相当であった。УТА Ф.А3-Д.1-ХН.369-Х.5.

¹² О. Батсайхан. Монголын сүүлчийн эзэн хаан Богд Жавзандамба хутагт. УБ. 2011. p.202.

「共戴」について

ツェベーン・ジャムツァラーノがコトヴィチに宛てた書簡に、現在あらゆる新聞が共戴1年と書いている、と記した後、「これはインドのマハーサマディに起源することである。日光というのはハーンの称号であり、これもまたインドから伝わってきた」ということを記している。マハーサマディは、インドの建国者とされる伝説のハーンである。モンゴル人の歴史叙述において、マハーサマディはモンゴル人の先祖と見なされている。エルデニイン・トブチでは、モンゴルのハーン達の起源をチベット、インドの皇帝達の起源と結びつけて説明している¹³、とクリューガーは記した。

ツェベーン・ジャムツァラーノは、コトヴィチに1912年1月22日付で書簡¹⁴を作成し、「現在全ての紙（モンゴル国家の公文書のこと：バトサイハン）に、共戴1年何月何日と書かれている。これは、インドのマハーサマディ王、日光というのもまたインドの伝説に出てくるハーンの名義である。私を驚かせたことがある。それは、チンギス時代の伝統がない、ということである」と記した¹⁵。

ツェベーン・ジャムツァラーノは1910年にエジェン・ホローに行った。そのみならず、これについてジャムツァラーノはハンダドルジに語り、オルドスにあるチンギスのハル・スルド、チンギスのオンゴンについて伝えた。すると、ハンダ・ワンは「そうか」と声を上げ、「我らは貴君の助言通り、このスルドとオンゴンをモンゴル統一に利用できる」と言った。1913年に、ボグドの政府が内モンゴルへ派兵した際、オルドスにあるチンギスのオンゴンを庇護下に確保することを望んでいたことを否定はしない¹⁶。

だが、ボグド・ハーンは、1911年にモンゴル国のハーンとなり、自分の国を建設する考えを抱いていたことを否定すべきではないように思われる。マハーサマディに起源する伝統をボグド・ハーンがかなり利用したことは事実であろう。

1911年にモンゴル独立を宣言した後、「大モンゴル国家」という語が散見されるのは、チンギスの黄金の一族の王公タイジ達の影響によるものか、彼らを引き込むべくボグドが利用した言葉であるようだ。このため、欽定モンゴル国法文書には「各アイマクのタイジの中で、チンギス・ハーンの息子、孫達から生まれたる者は、親族タイジとせよ」¹⁷という指示が入っているようである。ボグド・ハーンはモンゴル国家の伝統を受け継いでいることを示すため、チンギス・ハーンとその血縁継承者達の帽子を模倣させ、ハーンの帽子に金剛石を付けた¹⁸、とポポフが記している。

ボグド・ゲゲーンは如何なる名の国のハーンとなったのか、という問題は重要である。

¹³ Krueger, J. R. *The Bejewelled Summary of the Origin of Khans-A History of Eastern Mongols to 1662*, by Sagang Sechen (Part 1), Bloomington, 1967. p.41.

¹⁴ В. Котвичийн хувийн архиваас олдсон Монголын түүхэнд холбогдох зарим бичиг. УБ. 1972. р.137.

¹⁵ В. Котвичийн хувийн архиваас олдсон Монголын түүхэнд холбогдох зарим бичиг. УБ. 1972. р.136.

¹⁶ Uradyn E. Bulag. *Nationalism and Hybridity in Mongolia*. Oxford University Press. 1998. p.221.

¹⁷ Зарлигаар тогтоосон Монгол Улсын хууль зүйлийн бичиг. УБ. 1994. р.28.

¹⁸ И.И.Попов. *От небесной империи к Серединной империи*. М. 1912. с.267.

1990年代以前のモンゴル史の文献では、殆どがボグド・ハーン制モンゴル国、あるいは自治モンゴルという名で書かれている。つまり、Sh.サンダグは「ボグド・ハーン制モンゴル国」¹⁹と名付け、L.ジヤムスランは「共戴モンゴル国」²⁰と表記した。モンゴル国ハーンにボグド・ジェブツンダムバ・ホトクトを推戴した次の日、モンゴル政府が清朝の3衙門に送った電報には、「皆でボグドを推戴して主となし、国号をモンゴルとして時代を継承し、北方の領域を元来の主が回収し、全うして確保した」とある。Sh.ナツァグドルジは『満洲支配期ハルハ概史』で、1911年にモンゴルが独立を宣言し、「国名をモンゴル、年号を共戴と名付け、イフプレーを国の首都とするようそれぞれ決定した²¹」と1963年に書き記していた。国名をモンゴルとしたことは、全モンゴル氏族に関わる名称であり、出自及び歴史に関して1つであるということを示したものと思われる。

ハーン号について話されている時に、共戴モンゴル国の日光万寿ボグド・エゼン・ジェブツンダムバ・ホトクト・ハーンと名付けて記したことも、ハーン号に関わりあることである。

国名については、公文書史料に、国号をモンゴルとすると記録されているのは疑いないことである。国史の名称には、『欽定モンゴル国伝：1918-1919』と、モンゴルの名が入れられている²²。法の名称としては、『欽定モンゴル国法文書』と書かれている。これは、母国史から来る伝統を取り入れたということであろう。

モンゴル国家の源：バローン・ウルグー

バローン・ウルグーはアブタイ・サイン・ハーンの宮殿であった。モンゴル国家の源たる宮殿は、モンゴル帝国首都カラコルム、エルデネ・ゾーにあったが、1639年に1世ボグド、ウンドゥル・ゲゲーンの宮殿の居地が、シレート・ツァガーン湖に置かれた。その後、源たる宮殿をエルデネ・ゾーのソヨンボ仏塔から移し、ウンドゥル・ボグドのウルグーが黄帯宮殿の西北側に置かれた後、「バローン・ウルグー」と言うようになった。1877、1892年の2回バローン・ウルグーに行った²³A.M.ポズネーエフが記したところでは、「バローン・ウルグーはアブタイ・サイン・ハーンの宮殿と言われている。アブタイの孫、ウンドゥル・ゲゲーン・ザナバザルは、そのアブタイ・サイン・ハーンの宮殿をエルデネ・ゾーからボグド・ジェブツンダムバ・ホトクトの宮殿の傍へ持ってきた。…アブタイ・サイン・ハーンのモンゴルゲルは…驚くほど大きい。アブタイ・サイン・ハーンのモンゴルゲルには、300人程が余裕を持って収まることができる」ということである。

1874年に、8世ボグド・アグワーンロブサンチョイジンニヤムダンザンワンチグバルサムボーがチベットから招来されてきた時、トゥシェート・ハン・ナサントグトフはボグドの黄宮殿の西北側に立っていたバローン・ウルグーで迎え入れ、儀式を執り行い、誓詞

¹⁹ Ш. Сандаг. Монголын улс төрийн гадаад харилцаа. 1. УБ. 1971. pp.262,271,279.

²⁰ Л. Жамсран. Монголын сэргэн мандалтын эхэн. УБ. 1992. pp.67-68.

²¹ Ш.Нацагдорж. Манжийн эрхшээлд байсан үеийн Халхын хураангуй түүх. УБ. 1963. p.268.

²² Монгол улсын шастир. Дэд боть. УБ. 1997. p.85.

²³ А. М. Позднеев. Монголия и Монголы. Т.1-2, СпБ. 1896. ; А. М. Позднеев. Ургинские хутухты. СпБ. 1879.

を述べた後、座に奉戴した²⁴。バローン・ウルグーの表敬儀礼は、20世紀の20年代まで続いていたが、断絶して中止になった。

ボグド・ハーンはエヘ・ダギナと共に毎年旧正月の元旦にバローン・ウルグーに赴き、火を焚いていた。これは、チンギスの国家を継承し、伝統を維持していることを表したものである。さらに、内務大臣ダーラマ・ツェレンチメドがボグド・ハーンに上奏したことによって、ニースレル・フレーのバローン・ウルグーの赤の護法尊の前に誓詞を捧げていた²⁵。

1920年1月、フレーの秘密グループのメンバーであるS.ダンザン、M.ドガルジャブ、D.ドグソム、Ö.デンデブ、D.スフバートル達もまた、ニースレル・フレーのバローン・ウルグーの赤の護法尊の前で誓詞を捧げていた。

このように、1911年のモンゴル民族革命の後、モンゴル人は自民族史に注意を向けていたのである。また、当時の史料となる性質を有する文献には、マグサルジャブ・ホルツの『モンゴル新史』(1927)、デンデブの『モンゴル史』(1934)がある。加えて、1911年のモンゴル民族革命の問題を詳細な史料を用いて描き出した『モンゴル国自治政府時代の実情と重要事の記録概要なる歴史文書』²⁶では、1911年にモンゴル国が独立を宣言し、ボグド・ゲゲーンを国のハーンとして推戴したことについて述べられている。この史料は、Sh. ナツァグドルジが1960年に出版する際に、思想上の理由から、一部を重要でないとして省略してしまったものである。だが、報告者が出版されなかった部分を補って完全な形で1992年に公刊した。この省略されていた部分にチンギスの名が出てくる。

以上に述べたことには、チンギス時代の伝統が僅かながら入っていることを見出すことができる。また、インド、チベットの伝統がより強く表現されていることも明らかである。

おわりに

1911年の民族革命の時、ボグド・ジェブツンダムバ・ホトクトは、モンゴル国ハーンに推戴され、国家、独立を復興し宣言する儀礼を行った。その儀式の状況を見ると、チンギス時代に関連するモンゴル国家の伝統と言うよりも、インド、チベットの影響を受けた仏教の伝統がより強く表現されていることを容易に見出すことができる。仏教は、20世紀初期、モンゴル人を民族独立闘争に統一する一定の重要な影響力を発揮した要素である。ハルハ・モンゴルの仏教の長がモンゴル国の長、ハーンに推戴されたことが、その現れであると思われる。

だが、モンゴルの伝統は、1911年の大国家儀式に一定の地位を占めていたと言うべきであろう。国家、独立を復興して宣言した後、モンゴル人は自民族史、伝統により注目するようになったと思われる。

²⁴ С. Ичинноров. Анхдугаар Богд Өндөр гэгээн Занабазар. УБ. 2009. р.48.

²⁵ Г. Дашням. Монгол улсын тусгаар тогтнол ба Нийслэл Хүрээний Баруун өргөө. Манай Монгол сэтгүүл. 01-02. 2001. р.28.

²⁶ Монгол улсын автономн хэмээх өөртөө эзэрхэн засах эрхт засгийн үеийн үнэнхүү явдал чухам байдал, чухал учрыг тэмдэглэсэн товч өгүүлэл хэмээх түүх бичиг. УБ. 1992. pp.24-25.